トピックス

生命保険金額に影響を及ぼしている要因

前第二経営経済研究部研究官　　濵本　浩幸

1　はじめに

生命保険金額に影響を及ぼしている要因はどのようなものであろうか。家計レベルの個票データを利用して、この要因について実証的に分析してみたい。

まず、生命保険はどのような目的から需要されるのであろうか。生命保険文化センターの「平成12年度生命保険に関する全国実態調査」によると、直近加入契約（民保）の加入目的（複数回答）のうち主なものは、「万一のときの家族の生活保障のため」が60.3%、「医療費や入院費のため」が54.6%、「災害・交通事故などにそなえて」が24.4%、「老後の生活資金のため」が12.2%、「子どもの教育・結婚資金のため」が11.3%となっている。このことから、生命保険の主な加入目的は①遺族保障目的、②医療費補完目的、③貯蓄目的に大きく分けることができる。

これらの目的が生命保険金額にどのように影響を与えるかを考えてみると、①遺族保障目的は定期保険などの保障型の保険の購入に影響を与えると考えられ、加入目的で「万一のときの家族の生活保障のため」の回答率が最も高くなっていることから、①遺族保障目的は生命保険金額に最も大きく影響を与えると考えられる。②医療費補完目的は疾病・医療保険などの保険の購入に影響を与えると考えられるが、現状では特約として購入することが多いため、生命保険金額にはそれほど影響を与えないと考えられる。③貯蓄目的は普通養老などの貯蓄型の保険の購入に影響を与えると考えられるが、加入目的のうち「老後の生活資金のため」などの貯蓄目的ととれるものの回答率はそれほど高くはないこと、貯蓄型の保険は保障型の保険に比べ保険金額に対する保険料は高くなるため保険金額は保障型より小さくなると考えられることから、③貯蓄目的は生命保険金額には影響を与えるものの、その大きさは①遺族保障目的の与える影響に比べると小さくなろう。

以下では、「世帯主の保険金額」と「家族全員の保険金額」について、それぞれに影響を及ぼしている要因について分析している。

推計結果より、①世帯主の保険金額、家族全体の保険金額とも、収入、子供の数、配偶者の余命の影響を受けている。②世帯主が個人経営・自営業に従事している場合は、世帯主の保険金額を大きくする傾向がある。③配偶者がフルタイムで働いている場合には、家族全員の保険金額が大きくなっており、このことは配偶者が自らの保険に入っている可能性が高い、ことが示された。

2　利用データ

分析に使用したのは、郵政研究所が実施している「家計における金融資産選択に関する調査（平成10年度）」である。このアンケート調査は、昭和63年（1988年）から実施している調査で、今回が第６回目にあたる。調査地域は全国で、調査対

図表１　変数の特性

変　　数	平　均　値	標準偏差	最　小　値	最　大　値
世帯主の保険金額（万円）	2,469.5	2,424.9	1.0	30,000.0
家族全員の保険金額（万円）	3,975.3	3,833.4	1.0	45,000.0
夫婦の年収（万円）	562.3	343.0	0.0	4,000.0
家計の年収（万円）	715.1	541.5	20.0	8,960.0
世帯主の年齢（歳）	50.5	12.7	22.0	83.0
世帯主の年齢の二乗	2,711.7	1,286.3	484.0	6,889.0
配偶者ダミー変数	0.912	0.283	0.000	1.000
同居の子供の人数（人）	1.3	1.0	0.0	7.0
同居の子供の配偶者ダミー変数	0.058	0.233	0.000	1.000
同居の親ダミー変数	0.186	0.389	0.000	1.000
配偶者フルタイム就労ダミー変数	0.137	0.344	0.000	1.000
農林漁業（世帯主）ダミー変数	0.036	0.186	0.000	1.000
個人経営・自営業（世帯主）ダミー変数	0.170	0.375	0.000	1.000
パート・アルバイト（世帯主）ダミー変数	0.034	0.181	0.000	1.000
無職（世帯主）ダミー変数	0.149	0.356	0.000	1.000
会社の業績悪化により収入が減少する不安ダミー変数	0.438	0.496	0.000	1.000
病気・けがの不安ダミー変数	0.704	0.456	0.000	1.000
介護が必要になる不安ダミー変数	0.520	0.500	0.000	1.000
引退後、生活が不安定になる不安ダミー変数	0.442	0.497	0.000	1.000

象は世帯主が20歳以上80歳未満である世帯（単身世帯を含む。）、標本数は6,000世帯、標本抽出法は層化多段無作為抽出法、調査法は留置面接法である。回収されたサンプルは3,754（回収率62.6%）となっている。

分析にあたりサンプルには次の限定を加えた。①保険に加入していて、保険金額、収入額、世帯主の年齢、世帯主の職業を回答している。②同居している家族の有無、人数について回答している。③不安に思う事柄について回答している。

限定を加えた結果、分析の対象となったサンプルは1,539となった。変数の主な特性は、図表１のとおりである。

3　家計の生命保険加入状況（保険金額）

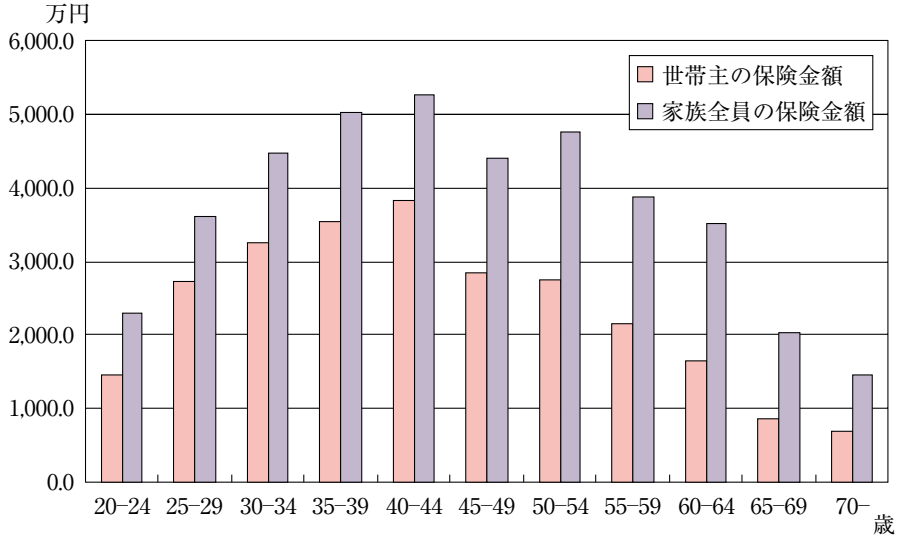
3.1　世帯主の年齢別にみた保険金額

世帯主の年齢別に、世帯主の保険金額と家族全員の保険金額の平均額をみてみる。（図表２）

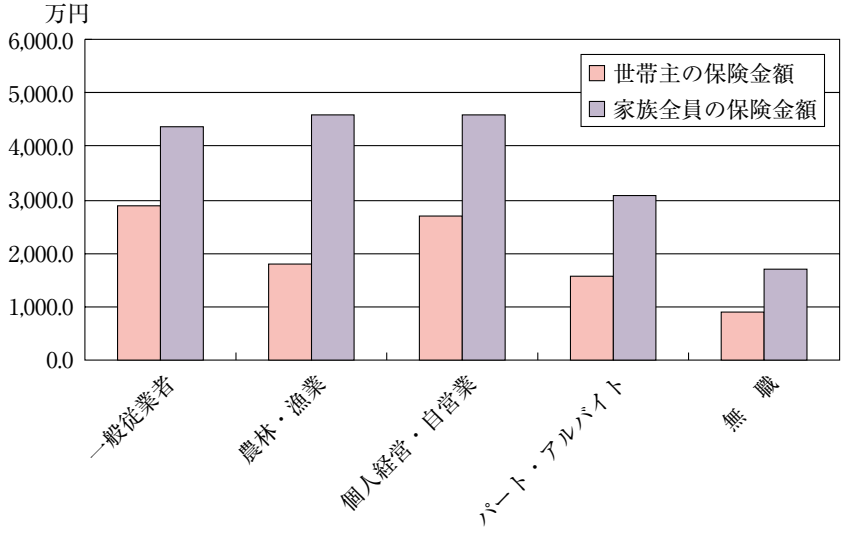
世帯主の保険金額は40-44歳まで上昇しているが、それ以上の年代になると徐々に低下している。保険の加入が遺族保障を目的にしていることを考えると、保険金額の大きさは、世帯主が死亡した場合の遺族として一般的にあげられる配偶者と子供の生活保障を考慮して決定されているであろう。30歳代の保険金額が大きくなっているのは、30歳代で結婚して配偶者を持つ人が多いためと考えられ、また、30～40歳代で保険金額が大きくなっているのは、独立する前の子供がいることが多く、万一のときの子供の生活保障が必要なためと考えられる。50歳代から保険金額が徐々に低下しているが、これは子供が独立していくため必要な遺族保障が少なくなってくることと、配偶者の余命が短くなっていくため遺族保障の必要額が少なくなってくることによるものと考えられる。

家族全員の保険金額については、上述の世帯主の保険金額に加え、同居している家族構成の影響を受けよう。子供の配偶者と同居している場合などは、子供にも収入があり、子供自身も自ら保険

図表 2　世帯主の年齢別にみた保険金額



図表 3　世帯主の職業別にみた保険金額



に加入していると考えられ、家族全員の保険金額をみるとそれだけ大きくなっていよう。

また、女性就業者が近年増加してきているが、なかでも配偶者がフルタイムで働いている場合には、自らの保障目的、貯蓄目的から保険に加入している可能性がある。

3. 2　世帯主の職業別にみた保険金額

次に、世帯主の職業別に、世帯主の保険金額と家族全員の保険金額の平均額をみてみる。（図表3）

世帯主が無職、パート・アルバイトの場合は、世帯主の保険金額、家族全員の保険金額とも小さくなっている。これは、世帯主が無職、パート・アルバイトの場合は一般従業者に比べ収入が少なくなるため、その影響が反映されているものと考えられる。

農林・漁業に従事している場合は、一般従業者

に比べ、世帯主の保険金額が小さく、家族全員の保険金額が大きくなっている。この理由としては、家族の年齢構成が異なることが考えられる。農林・漁業に従事している人は高齢の人が多く、より大きな遺族保障を必要とする若い人が少ないため、その影響が反映されているものと考えられる。また、家族全員の保険金額が大きくなっているのは、家族構成が影響を与えている可能性もあるが、公的年金のいわゆる2階部分がないので、貯蓄に力をいれており、家族で分散して貯蓄型の保険に入っているとも考えられる。

3. 3　子供の有無別にみた世帯主の保険金額

子供の有無別に世帯主の保険金額の平均額をみてみる。(図表4)

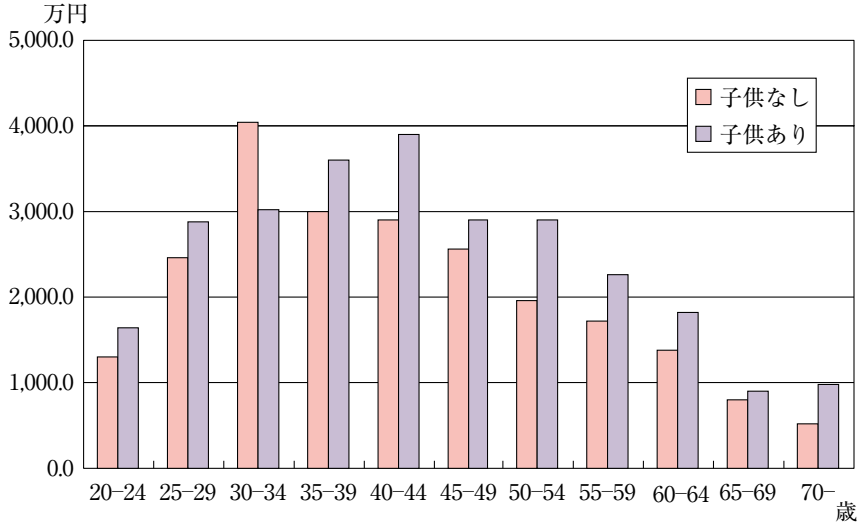
子供なしの人は30歳代前半までは年齢が上がるにつれ保険金額が増加しているが、その後は年代が進むにつれて保険金額が減少している。それに比べ、子供のある人は40-44歳まで保険金額を増加させており、それ以降の年代においても、子供ありの人の方が子供なしの人に比べて保険金額は約2～3割程度大きくなっていることがわかる。これは、万一のときの子供の生活保障のために保険に加入していることを示していると考えられる。

4　分析方法

推計は最小二乗法により行った。「世帯主の保険金額」「家族全員の保険金額」をそれぞれ被説明変数とし、それを家族の属性で回帰した。なお、将来に対する意識も保険金額に影響を与える可能性があるため、将来に対する不安も含めて回帰している。

使用した説明変数は「夫婦の年収（世帯主の保険金額の回帰に使用)」「家計の年収（家族全員の保険金額の回帰に使用)」「世帯主の年齢」「世帯主の年齢の二乗」「配偶者ダミー変数」「同居の子供の人数」「同居の子供の配偶者ダミー変数」「同居の親ダミー変数」「配偶者フルタイム就労ダミー変数」「農林漁業（世帯主）ダミー変数」「個人経営・自営業（世帯主）ダミー変数」「パート・アルバイト（世帯主）ダミー変数」「無職（世帯主）ダミー変数」「会社の業績悪化により収入が減少する不安ダミー変数」「病気・けがの不安ダミー変数」「介護が必要になる不安ダミー変数」「引退後、生活が不安定になる不安ダミー変数」である。

図表4　子供の有無別にみた世帯主の保険金額



説明変数の予想される符号は次のようになる。

年収に関しては、年収が多いほど保険金額も大きくなると考えられ、符号はプラスとなろう。

年齢に関しては、年齢が高くなるほど、子供が独立し、配偶者の余命も短くなってくることから必要保障額は小さくなってくると考えられるため、符号はマイナスとなろう。ただし、保険に加入すべきという意識について、家庭を持てばすぐ芽生え実現されるものではなく、いくらかのタイムラグがあるものと考えると、30代までにかけては保険金額が上昇していくものと考えられる。この場合には、「世帯主の年齢」の符号はプラス、「世帯主の年齢の二乗」の符号はマイナスとなろう。

子供の数に関しては、子供の数が多いほど万一のときの子供の生活保障の必要額は大きくなるので、「同居の子供の人数」の符号はプラスになろう。

同居する家族については、同居している家族がいるだけ、家族全員の保険金額は大きくなると考えられ、「同居の子供の配偶者ダミー変数」「同居の親ダミー変数」の符号はプラスとなろう。

また、配偶者がフルタイムで働いている場合、自らが死亡した場合には家計の収入は減ってしまうこととなるので、その場合の影響を軽減するために保険に入る可能性があると考えられる。また、不時の出費に備えて貯蓄型の保険に加入する可能性もあると考えられるので、家族全員の保険金額の回帰においては「配偶者フルタイム就労ダミー変数」の符号はプラスになろう。

5　推計結果

推計結果は図表５のとおりである。

まず、「世帯主の保険金額」についての推計結果からみてみると、「夫婦の年収」がプラスに有意（ｔ検定を90%水準でクリアしているもの。以下同じ。）となっており、収入が多い人ほど保険金額は大きくなっている。

年齢については、「世帯主の年齢の二乗」がマイナスに有意となっている。「年齢」は有意にならなかったものの符号はプラスになっている。これは、保険に加入すべきという意識は家庭を持てばすぐ芽生え実現されるものではなく、いくらかのタイムラグがあることが反映されていると解釈できる。また、配偶者の余命は年齢が高くなるにつれて短くなることから、その代理変数として「世帯主の年齢の二乗」がマイナスに有意になっていると解釈できる。

「同居の子供の人数」がプラスに有意となっている。独立前の子供がいるほど、万一のときの子供の生活保障が必要なため、保険金額を大きくしていると解釈できる。

職業については、「個人経営・自営業（世帯主）ダミー変数」がプラスに有意となっている。個人経営・自営業の場合には、自ら経営を行っているため、世帯主が死亡した場合の影響が一般従業者に比べて大きいと考えられ、その分、保険金額を大きくしていると解釈できる。

次に「家族全員の保険金額」について推計結果をみてみる。

「家計の年収」はプラスに有意となっており、収入が多い家計ほど保険金額は大きくなっている。年齢については、「世帯主の保険金額」の推計結果と同様に「世帯主の年齢の二乗」がマイナスに有意となっている。また、「同居の子供の人数」についても同様にプラスに有意となっている。

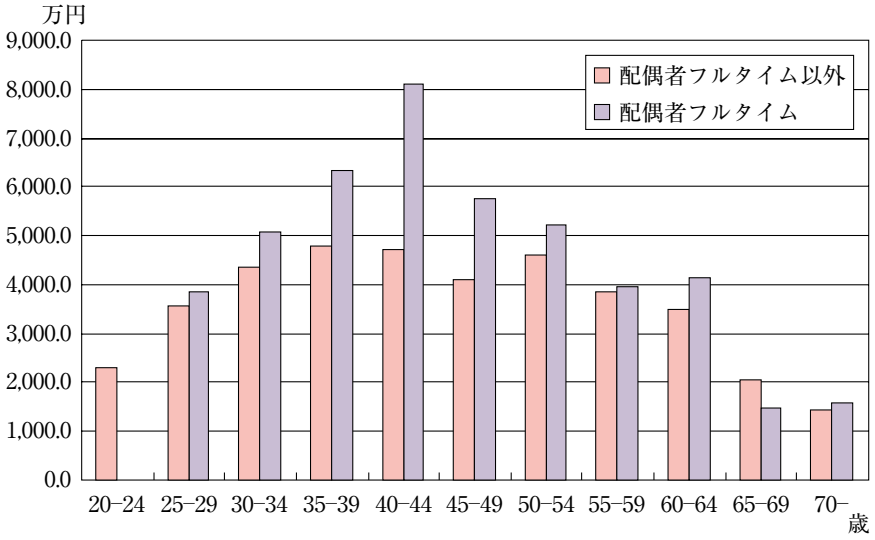
「同居の子供の配偶者ダミー変数」がプラスに有意となっている。子供の配偶者がいれば、その分家族人数が増えるので家族全員の保険金額は大きくなっているということであるが、子供に配偶者がいるということはもうひとつの家庭があるということであり、子供自身も自らの家庭のために保険に加入していると考えられ、家族全員の保険

図表５　生命保険金額の推計結果

変　　数	世帯主の保険金額 推計値	t値	家族全員の保険金額 推計値	t値
定数項	1,724.4**	2.494	1,383.5	1.296
夫婦の年収または家計の年収	1.9***	6.794	1.8***	4.678
世帯主の年齢	24.9	0.841	63.7	1.253
世帯主の年齢の二乗	−0.8***	−2.677	−1.2**	−2.275
配偶者ダミー変数	109.7	0.777	95.9	0.362
同居の子供の人数	253.8***	3.304	579.6***	3.785
同居の子供の配偶者ダミー変数	335.6	1.161	1,432.1***	2.772
同居の親ダミー変数	−72.2	−0.428	443.5	1.458
配偶者フルタイム就労ダミー変数	175.6	0.799	900.4**	2.532
農林漁業（世帯主）ダミー変数	79.8	0.219	1,072.0*	1.690
個人経営・自営業（世帯主）ダミー変数	406.0**	2.057	664.9**	2.348
パート・アルバイト（世帯主）ダミー変数	83.5	0.310	−96.3	−0.220
無職（世帯主）ダミー変数	213.3	1.105	−196.5	−0.632
会社の業績悪化により収入が減少する不安ダミー変数	160.5	1.158	103.5	0.495
病気・けがの不安ダミー変数	24.3	0.173	−40.6	−0.191
介護が必要になる不安ダミー変数	−63.1	−0.453	1.6	0.008
引退後、生活が不安になる不安ダミー変数	−27.9	−0.219	−37.1	−0.181
修正R二乗	0.215		0.197	
F値	27.259		24.547	
サンプル数	1,539		1,539	

＊＊＊…１％水準で有意　＊＊…５％水準で有意　＊…10％水準で有意

図表６　配偶者の就労状況別にみた家族全員の保険金額



金額はそれだけ大きくなっているとも解釈できる。

職業については、「個人経営・自営業（世帯主）ダミー変数」は「世帯主の保険金額」の推計結果と同様にプラスに有意となっている。また、「農林漁業（世帯主）ダミー変数」がプラスに有意となっている。年齢や同居している家族をコントロールしていることから、これら以外の要因が影響を与えていることになる。農林・漁業に従事し

ている人は公的年金のいわゆる2階部分がないので、その分、自助努力する必要があるため、生命保険に入っている可能性がある。

「配偶者フルタイム就労ダミー変数」がプラスに有意となっていることが注目される。年収をコントロールしていることから、フルタイムで働いている人は自らの保障のために保険に入っていると解釈できる。また、配偶者がフルタイムで働いている場合には、家計の支出管理に多くの時間が割けないため、支出に関して甘い判断が行われている可能性もあるが、年収をコントロールしているので、その影響が仮にあったとしてもそれほど大きくないであろう。

世帯主の年齢別に、配偶者がフルタイムで働いている場合とそうでない場合の家族全員の保険金額の平均額をみたものが図表6である。ほとんど全ての年齢でフルタイムの場合が保険金額が高くなっているが、特に35-39歳、40-44歳、45-49歳での差が大きい。それ以上の年齢になってくると差がなくなっていることから、フルタイムで働いている配偶者は自らが死亡した場合の子供の生活保障を考慮しているのではないかと思われる。

6　むすび

以上のように、「世帯主の保険金額」と「家族全員の保険金額」について、それぞれに影響を及ぼしている要因について分析した。

推計結果より、①世帯主の保険金額、家族全体の保険金額とも、収入、子供の数、配偶者の余命の影響を受けている。②世帯主が個人経営・自営業に従事している場合は、世帯主の保険金額を大きくする傾向がある。③配偶者がフルタイムで働いている場合には、家族全員の保険金額が大きくなっており、このことは配偶者が自らの保険に入っていると考えられる、ことが示された。

なお、今後の課題としては次のものがある。⑴以上の分析は保険に入っている人を対象に行った分析であり、保険に入っていない人は考慮されていない。保険に入る確率を考慮した分析が必要となろう。⑵以上の分析では将来に対する不安は有意にならなかったが、年代を区分して推計すると、加入率の低い若年層で有意になるとも考えられる。年代を区分して分析をしてみる必要があろう。⑶この分析は1時点のクロスセクション分析であるので、この結果が普遍的なものかどうか、異時点間でも比較を行ってみる必要があろう。